

に勸めて、其の孟達を侵凌して叛き去らしめ、又關羽を救はざるの過に因て之を除かしめ、彭種が治中従事と爲りて徒歩より起りて、一朝州人の上に處し、形色囂然として自ら矜り、得遇滋々甚しきや、侯外兼を接待すと雖も、内善すること能はず、屢密かに昭烈に言て、兼心大に志廣し、保安すべき難しと曰ひ、昭烈が侯を敬信するを以て、加ふるに兼が行事を察し、意稍疎じて、之を左遷し、侯をして怨言を出し、爲めに獄に下るに至らしめたるを觀るに、侯が包容宏大と雖も、亦善せざる所あり、且つ後患を慮りては、一二人物を排除することなくんばあらざるを見る。之を總ぶるに、赤壁戰後、劉氏多士の時は、則ち侯が衆力翕集分業の時にして、奇謀は之を龐統法正に任じ、攻戰は之を關張馬黃以下に任じ、其他百揆、各々材能を擇で、委任の事を専らにせしめ、敢て相掣肘せず、是れ業の成功あるや則ち益州漢中を得、其の失敗あるや、則ち關羽の沒、稱歸の敗ある所以なり、之を後年獨任の時に比して、各々得失あるは、當さに後半生の記事に於て之を對照すべし。

昭烈正號

侯が前半生の行事と、其時局の轉移と相合して歸結せる者を、昭烈の正號とす。建安二十五年十月、曹丞獻帝を廢して山陽公とし、自から皇帝と稱す、翌年に至りて蜀中訛りて傳へ言ふ、漢帝害せらるると、昭烈喪を發し、制を服し、諡して孝愍皇帝と曰ふ、羣下説て昭烈に尊號を稱せんことを勸む、侯も亦許靖、糜竺、顧恭、黃權、王謀等と上言して勸進す、昭烈未だ許さず、武侯説て曰く、昔し吳漢耿弇等、初め世祖を勸めて帝位に即かしむ、世祖辭讓、前後數四、耿純進て言で曰く、天下の英雄、嗚々として望む所あるを冀ふ、如し議に従はざらん者は、士大夫各歸て主を求めて、公に従ふことを爲す無けん、世祖純が言の深く至れるを感じ、遂に之を然諾す、今曹氏漢を篡ひ、曹氏主を無にす、大王は劉氏の苗族、世に紹て而して起る、今帝位に即くは、乃ち其の宜しき也、士大夫大王に隨て久しく勤苦する者は、亦尺寸の功を望まんと欲すること、純

が言の如き耳と、司馬費詩上疏して曰く、
殿下以曹操父子。偏主篡位。故乃羈旅萬里。糾合士衆。將以討賊。今大敵未
克。而先自立。恐人心疑惑。昔高祖與楚約。先破秦者王。及屠咸陽。獲子嬰。
猶懷推讓。况今殿下未出門庭。便欲自立邪。愚臣誠不爲殿下取也。
昭烈悦びず、詩を左遷し、皇帝の位に成都武擔の南に即き、侯を策して丞相と
爲す、曰く、

朕遭家不造。奉承大統。兢兢業業。不敢康寧。思靖百姓。懼未能綏。於戲丞
相亮。其悉朕意。無怠輔朕之闕。助宣重光。以照明天下。君其勵哉。
侯丞相を以て尙書事を録し、節を假る、是を侯が前半生の大段落とす。
習鑿齒曰。夫創本之君。須大定而後正己。篡統之主。侯速建以係衆心。是故
惠公朝虜。而子圍夕立。更始尙存。而光武舉號。夫豈忘主微利。社稷之故也。
今先主糾合義兵。將以討賊。賊疆禍大。主沒國喪。二祖之廟。絶而不祀。苟
非親賢。孰能紹此。嗣祖配天。非咸陽之管。杖正討逆。何推讓之有。於此時
也。不如速尊有德。以奉大統。使民欣反正。世覩舊物。伏順者齊心。附逆者

同懼。可謂開惑矣。其黜降也宜哉。』是れ費詩が諫疏を非として、昭烈の正統
を善とせる者、裴松之云ふ、鑿齒か論議、惟此論最も善しと、既に詩が開惑
を知らず、侯が明達は必ずしも言はざる也。

正篇終

續篇目次豫定

- 八、 秭歸敗師、托孤顧命
- 九、 南中平定
- 十、 六出伐魏、將星隕落
- 十一、 侯が治國、用人
- 十二、 侯が制戎、逸事
- 十三、 侯が品性を總論す、并に其の兄弟兒子
- 十四、 侯に關する評論の沿革、及び勝蹟

附錄 諸葛武侯年譜

漢靈帝光和四年辛酉我が書紀紀年成務天皇五十一年に當る

是歲疾邛邛陽都に生る○皇子協生る即ち獻帝なり

五年壬戌

六年癸亥

中平元年甲子

黃巾賊起る○黨人を赦す

二年乙丑

三年丙寅

四年丁卯

長沙の賊區星自ら將軍と稱す詔して議郎孫堅を以て長沙太守と爲し討て之を平らぐ堅を烏程侯に封ず

五年戊辰

近太常劉焉益州に天子の氣あるを以て乃ち求めて益州牧と爲る

六年己巳

帝崩す皇子辯を立つ○悉く宦官を誅す○董卓帝を廢し陳留王協を立つ

獻帝初平元年庚午此歲成務天皇崩す

侯年十歳○關東兵を起して董卓を討じ袁紹を推して盟主と爲す○昭烈平原相

を領し關羽張飛を以て別部司馬と爲す

二年辛未

長沙太守孫堅董卓を討じて大に之を破る卓洛陽諸陵を發掘し帝を擁して長安

に入る堅雒に入りて諸陵を修む○是歲孫堅卒す

三年壬申此歲仲哀天皇元年なり

司徒王允謀りて董卓を誅す○卓が部將李傕郭汜兵を稱げて關を犯し王允を殺す

四年癸酉

曹操徐州牧陶謙を攻め男女數十萬を殺し其の三縣を屠る以て其父嵩が謙が別

將に殺されし怨に報す○曹操擊て袁術を破る

皇平元年甲戌

陶謙卒す衆昭烈を推して徐州牧を領す

二年乙亥

侯が從父玄袁術に豫章太守に署せらる侯及び侯の弟均を將て官に之く會漢更

小其朱離を遷で玄に代ふ玄荊州に往て劉表に依る玄卒す侯南陽襄鄧間に寓す此

事を以て此歲に係るは清の朱璜が年譜に従ふ未だ其の據る所を知らず

建安元年丙子

車駕洛陽に至る曹操迎へて都を許に遷す○袁術昭烈を攻む呂布下邳を襲ふ昭

烈敗走して曹操に歸す操表して豫州牧と爲す

三年丁丑

袁術帝と稱す

三年戊寅

侯徐元且及び子公威石廣元と遊學す此事を以て此歲に係るは朱璜が年譜○曹操呂

布を襲殺し昭烈を表して左將軍と爲す

四年己卯 荆州牧劉表職貢を修めず多く借偽を行ふ詔書して其事を班下す○車騎將軍董承密詔を受くと稱し昭烈と曹操を圍る會々操昭烈を遣して袁術を撃つ昭烈遂に徐州刺史車胄を殺す東郡郡縣多く昭烈に従ふ○袁術走り死す

五年庚辰 仲哀天皇崩す

侯年三十歳○董承謀洩る操之を殺し自ら昭烈を撃つ昭烈袁紹に奔る○孫策卒す弟權代りて其衆を領す侯が兄權に歸す

六年辛巳 神功皇后攝政元年

曹操昭烈を汝南に撃つ昭烈荆州に奔る劉表其兵を益して新野に屯せしむ

七年壬午

袁紹死す

八年癸未

九年甲申

十年乙酉

十三年丙戌

荆州の豪傑多く昭烈に歸す劉表之を疑ひ夏侯惇于禁等を博望に拒がしむ昭烈惇等を誘て之を破る

十二年丁亥

侯年二十七歳時に昭烈新野に屯す徐庶因て侯が隆中の草廬に詣り之を見る○昭烈が子禪生る即ち後帝なり

十三年戊子

曹操丞相と爲る○劉表が子琮曹操に降る昭烈敗走す侯吳に使して孫權と連和す昭烈吳の將周瑜魯肅等と大に操を赤壁に破る○昭烈荆南四郡を徇つて之を降す侯其の賦税を調す

十四年己丑

昭烈荆州牧を領し公安に治す

十五年庚寅

侯年三十歳○孫權妹を以て昭烈に妻す○周瑜卒す○昭烈龐統を以て治中とす

十六年辛卯 ○益州別駕張松州牧劉璋に勸めて昭烈を迎へ張魯を撃たしむ軍議校尉法正等兵を將て來り迎ふ昭烈蜀に入る侯關羽等と荊州を鎮す

十七年壬辰

劉璋張松を殺し關成に勅して昭烈を通ずることなからしむ昭烈腹萌より兵を起して璋を撃ち進で涪城に據る

十八年癸巳

昭烈雒縣を攻む龐統卒す○曹操魏公と爲り九錫を加ふ

十九年甲午

侯關羽を留めて荊州を守り張飛趙雲等と蜀に入る昭烈雒を陥いれ侯等と合し之は成都を圍む劉璋降る昭烈益州牧を領し侯を以て軍師將軍とし左將軍府事を

二十一年乙未

昭烈孫權と荊州を分つ

三十一年丙申

曹操將を進めて魏王と爲る

三十二年丁酉

昭烈法正が謀を用ゐて兵を漢中に進む○孫權曹操に降る○魯肅卒す

三十三年戊戌

昭烈魏の將張郃を攻む克たず侯益州の兵を發して之に繼ぐ

三十四年己亥

昭烈曹操が將夏侯淵を撃て之を斬る曹操來りて昭烈を撃つ趙雲撃て操が軍を敗る操引き還る昭烈遂に漢中を有つ羣下表請して漢中王と爲す○關羽魏の將曹仁を樊に圍み威華夏に震ふ孫權が將呂蒙に乘じて江陵を取る羽走り還る蒙謀りて之を禽殺し荊州を取る

三十五年庚子

侯年四十歳○曹操卒す曹丕帝を廢して山陽公と爲し自ら帝と稱し黃初と改元

昭烈皇帝章武元年辛丑魏黃初二年○我が神功皇后

蜀中傳言す漢帝害に逢ふと漢中王喪を發し制を服す羣臣尊號を上つる許さず侯も亦之を勸む漢中王遂に帝位に即き改元す子禪を立て皇太子とす○侯丞相と爲る○帝關羽の没を耻ぢ師を出して吳を擊つ侯留りて成都を守る○張飛其下に殺さる○孫權臣を魏に稱す魏封じて吳王と爲す

二年壬寅魏黃初三年

帝が軍大に吳の將陸遜に敗られ魚復に還り名を永安と改む○魏吳の任子を責む孫權應ぜず魏遂に吳を擊つ權使をして來聘せしむ漢吳復た通ず

後帝建興元年癸卯魏黃初四年

昭烈帝不豫なり侯永安に至り顧命を受く昭烈崩す子禪立つ即ち後帝改元す○侯を封じて武鄉侯と爲し益州牧を領す政事皆侯に決す○南中四郡反す○鄧芝二を遣して好を吳に修む吳魏と絶つ○魏の華歆陳羣等書を侯に與へて藩と稱せしめんと欲す侯正議を作る

三年甲辰魏黃初五年

吳張温をして來聘せしむ復た鄧芝をして之に答へしむ

三年乙巳魏黃初六年

侯南征し遂に四郡を平げ南中の勁卒を蜀に移し號して飛軍と曰ふ其の産する所を取りて軍賦の用を給す○魏吳を伐つ

四年丙午魏黃初七年

侯南中より還る○魏主曹丕卒す子敏立つ

五年丁未魏太和元年

侯上表して諸軍を率ゐ出で漢中に屯し以て中原を圖る○侯が子瞻生る

六年戊申魏太和二年

侯魏を伐て祁山を攻む前軍馬稷侯が節度に違ひ魏の將張郃と戦て街亭に敗る侯稷を收へて之を斬り軍を引て漢中に還る上疏自貶して右將軍と爲り丞相の事を行ふ○侯復た上表して魏を伐ち陳倉を圍む二十餘日下らず糧盡て還る魏の將王雙來り追ふ侯擊て之を斬る

七年己酉魏太和三年

蜀漢武侯年譜

侯魏を伐て、武都陰平を抜く、復拜せられて丞相と爲る。○孫權帝と稱し、改元す、使をして來り告げしむ、侯衛尉陳震を遣して吳に使し、權と盟はしむ。○漢樂二城を築く

八年庚戌 魏太和四年 吳黃龍二年

侯年五十歲。○魏の曹真請て斜谷より來り寇す、魏主敕司馬懿等をして漢水に沂り、西城より真と會せしむ、侯出でて成固に次す、真が軍退く、侯魏延をして西羌に入らしめ、大に魏將郭淮を陽溪に破る。

九年辛亥 魏太和五年 吳黃龍三年

侯又魏を伐て、祁山を圍み、木牛を以て糧を運ぶ、司馬懿長安に屯し、張郃費禰郭淮等を督して之を禦ぎ、精兵四千を留めて上邽を守り、餘衆悉く出づ、侯自ら懿を上邽に逆ぶ、郭淮費禰等邀へ戦ふ、侯擊て之を破る、懿軍を斂めて險に依り、兵交るを得ず、懿張郃をして無當を攻めしめ、自ら中道を案じて侯に向ふ、侯魏延等をして逆へ戦はしめ、大に之を破る、斬獲極めて多し、懿還りて營を保つ、侯糧盡くるを以て軍を退く、懿張郃をして來り追はしむ、侯が伏弩發して郃を殺す。

十年壬子 魏太和六年 吳嘉禾元年

十一年癸丑 魏景初元年 吳嘉禾二年

侯木牛流馬を以て米を運び、斜谷に集め、郿關を治む

十二年甲寅 魏景初二年 吳嘉禾三年

山陽公魏に薨す、魏人諡して孝獻皇帝と曰ふ。○侯又斜谷より魏を伐ち、使を遣して吳に約し、同時に大舉す、侯進で渭南に軍す、司馬懿兵を引て渭を渡り之を拒ぐ、侯五丈原に屯し、兵を分て屯田し、久駐の計を爲す、懿と相持すること百餘日、侯數々戰を挑む、懿出でず、侯疾で軍に卒す、年五十四、長史楊儀、司馬費禰、護軍姜維等に遺命して、退軍の節度を爲す、懿敢て倡らす、谷に入りて輿を發す、軍は成都に還る、漢中定軍山に葬る。

後三十年炎興元年、詔して故丞相亮の爲めに廟を沔陽に立つ、魏の鍾會漢川に至り、侯の廟を祭り、軍士をして侯の墓所左右に於て芻牧樵采することを得ざらしむ。

明治三十年六月九日印刷
明治三十年六月十二日發行

(正價金三拾五錢)



著者 內藤 虎次郎
發行者 柴田 資郎

印刷者 山本 鏡次郎

發行所 東華堂

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市神田區今川小路二丁目
二番地電話本局六百九十二番

大賣捌所 東華堂支店
神田區裏神保町五番地

大賣捌所

大 賣 捌 所

東 全 全 大 仙 名 全 秋 大 全 橫 能 花 花 熊 金 青 大

古

京 阪 臺 屋 田 曲 手 代 輪 輪 本 澤 森 館

東 東 北 文 吉 木 片 川 成 板 柳 鮮 積 關 奈 長 宇 鎌 藤

岡 村 野 瀨 見 谷 田 島 都 崎 良

京 海 隆 海 東 清 郎 進 信 源 宮 書 書 書

平 文 四 大 兵 左 繁 衛 治 堂 治 堂 治 堂 郎 郎 店 店 店

堂 堂 館 堂 助 助 郎 助 助 門 治 治 治 治 治 治 治 治 治 治

大 賣 捌 所

東京 全堂 大仙 名全 秋大 全大 橫能 花能 花熊 金熊 大青
 古 阪 齋 屋 田 曲 手 代 輪 輪 本 澤 森 館

東京 海隆 北隆 文隆 吉岡 木村 片野 川瀨 成見 板谷 榭五 鮮進 積信 關忠 奈源 長崎 宇都 鎌田 藤
 京 隆 隆 海 隆 岡 村 野 東 瀨 清 五 郎 左 衛 門 繁 田 進 信 忠 源 次 宮 次 書 書 書 店 店 店 店 店 店

東華堂出版書目

小説 雜誌 新著月刊

每號の新作家として筆を執らるゝは社員として伊原青々園小杉天外水谷不倒後藤宙外島村抱月諸先生の外に廣津柳浪二葉亭四迷泉鏡花櫻場蓮郎大町桂月鹽井雨江武島羽衣坪内道遙綠堂野史高安三郎野口寧齋梶田半古富岡永洗鈴木華郎寺崎廣葉柳井細齋等諸先生なり其の口繪には必らず木版極彩色及寫真版の二葉をそゆ爾來世評噴々として優に文界の覇權を握るは人の知る處なり

三宅雄二郎氏序 内藤虎次郎氏著

近世文學史論

三百年間の文運、時代の昇降を經とし、關東關西兩中心の昂低を緯とし、堅論横説、絲毫を割折し、文字簡勁、別に一家の面目を具ふ、蓋し我邦思想最大發達期の歴史として、一種眼光猶人のごとくならざる者、讀者一閱過乃ち了せんか。

毎月一回(三日)發行
 定價、一部十五錢
 郵 稅 二 錢

定價、金三拾五錢
 郵 稅 金 四 錢

文學士 劍峯 藤田豊八氏著

支那文
學史稿

先秦文學

定價金 四十五錢
郵稅金 六錢
菊版紙質精良製本高尚

東洋に於ける先秦漢種の文化は、西洋に於ける古代希臘の文化と對比す可く、燦然たる光彩、陸離として人目を射、流風餘韻今に至りてなほ絶へざるなり。本書は支那文學史の第一巻として、先づ秦以前に於ける經史諸子を文學的側面より評論し盡くして殆ど餘蘊なし、特に地理の影響、時代の感化、文士の性格に注意し、在來の漢學者の口吻と頗るその趣を異にす。著者果してこの光彩陸離たる時代の文學を評論する才の學と筆とあるか、讀者の自ら之を知るに任す、弊堂また嗚々の言を費さざる可し。

文學士臨風笹川種郎氏著

支那戲曲小史

全

菊版製本美麗
定價金 三十拾錢
郵稅 四錢

本著は支那小説及戲曲の發達を論じ、各時代に於ける傑作を紹介し、之れが批判を試み、作家の一世に優れたるものを取て論評を加へたるもの、支那戲曲の性質を知らんと欲せば此の書實に東道の主人たり、其の評論の高妙なる、文字の雄健にして嫺雅なる、世間既に定論あり、豈に本著を讀過して而る後ち知るといはんや。

三繁合新
木野合新
天野合新
遊天著詩

松蟲鈴蟲

定價金 二十錢
郵稅金 二錢
製本瀟洒美麗●袖珍美本

天來の清光に酔うて街頭に嘯けば紅塵變じて白雲となり天遊の大脚に跨つて蒼溟に嘯けば玄風化して虹霓となりむ街頭に彷徨する者は來つて清光に酔へ蒼溟を翹望する者は來つて大脚に誇れ。
旭宇新岡久頼翁著

いろは三體帖

絹表紙白紙裏打折本
定價金 三十五錢郵稅四錢

短册習字帖

大奉書二ツ折、短册形地色潰、
金模様入、表紙支那繪子、大和
綴、製本最上美本定價金壹圓廿錢
小包料百里以外六錢以内八錢

假字は草書より出で、加ふるに國風の優麗を以てし、廻風雪を舞はし落花草に依るの妙あるを尙ぶ、書を學ぶ者の最も苦しむ所とす○新岡旭宇翁、今世の草聖を以て、又心を假字の書法に潜め、二玉の神韵に兼ねるに三蹟の飄逸を以てし、六朝より入りて上代様より出で、曼娜たること游絲の若く天嬌たること蛇鬪の如し、一種の書格、世俗筆道家流の至る能はざる所なり。今特に初學者に圭臬を示さんが爲めに此帖を草せらる、弊堂が切に請ふて之を梓行するは、亦今世俗書の陋態を一掃せんとするの微意に出づ、此帖一たび出でば、庶幾くは假字書格一變せんか。
附記する所、れ、ね、ん、レ、の解の如き、數百年假字書法の誤謬を正され、諸家未發の明解と稱せらる、此れ緒餘と雖も、亦以て翁が斯道に深遠なる一端を知るに足るべし

大學院國際公法專攻 明治法律學校講師
 高等商業學校教授 東京法律學院講師
 和佛法律學校講師 東京專門學校講師
 日本法律學校講師 法學士中村進午氏著

國際公法

正價金二圓五拾錢
 郵税金二十四錢
 ●菊版背皮シロース金字
 入●用紙上等●製本美麗
 無上●紙數一千四百頁●
 各官省の外前金を要す

國際公法は目下高等文官試験、判檢事辯護士試験に最も重要な科目なるに拘はらず、之を備論し、之を詳解せるもの、天下未だこれあるを聞かざるは竊かに以て憾となす處、弊堂今卒先して此の好著を世に紹介す、必ずして市井商估の擧に徴ふのみといはんや。
 著者は、夙に大學院にありて斯法を専攻し、都下五大法律學校及其他の學校講師にして學理の深遠高妙なること、既に業に學者の公評あり、曩日學習院が、君を推選して教授となし、更に斯學の蘊奥を究めしめんが爲め、歐洲に渡航せしめたるもの、豈に偶然の故とせんや、本著の眞價必ずしも贅せず、一度び世に出では恐らくは先後諸學者をして後へに驅若たらしむるものあらん。
 且つ夫れ現時國勢の一變に伴ひ、皇國臣民の必讀を要すること本著の如き、益し最も急をすべきもの、弊堂の微意、幸に江湖に争とせらるゝことを得ば、期する處に背かざるを喜ぶものなり。
 三浦數平輯

憲法、行政法、國際公法、 國際私法、經濟學、財政學 試験問題集 全

定價金十八錢
 郵税金二錢

附(文官試験) 規則 (判檢事試験) 辯護士試験

國際公法、國際私法、憲法、行政法等新に本年の試験科目として發表せらるゝや、人其眞著なきに苦しむ、弊堂擬きには公法論を世に紹介して聊か奮發たるの職を盡し今亦私法の胡觸將さに終へんとす、唯夫れ受験者諸君にありては、數科の科目億萬の文字一々記應せんは誠に難しとなす處、弊堂乃ち次て本書を世に紹介せんとなす、其公法私法は特に寺尾先生の校閱を求め、他は大學及高等文官試験及各指定法律學校の最近四年間の問題を蒐集し、傍ら試験規則を付して受験者諸君の參考に供せんとす、又以て研學の珍となすに足らば、本著の徒勞たらしむるを喜ぶものなり。

各宗管長肖像(寫眞版)入 總ふり假名
 大内青巒居士序 製本美麗金字入
 新誌主筆加藤咄堂著

佛敎界 四個格言

一部定價金三拾五錢
 廿部以上一割五分引
 郵税金四錢

第一篇 現今の四個格言問題 ●各宗協會の性質 ●各宗綱要の編纂 ●諍論の起因 ●調和符及其破裂 ●裁判の經過 ●本問題に對する評論
 第二篇 四個格言の評論 ●日蓮立敎以前の佛敎 ●日蓮上人 ●念佛無間論 ●禪天魔論 ●眞言の國論 ●律國賊論 ●四個格言の眞相 ●日蓮宗の本旨 ●過去に於ける四個格言問題
 第三編 四個格言問題の價值 ●時勢の傾向と四個格言問題 ●宗敎家の本務と四個格言問題 ●各宗合同と四個格言問題

法科大學教授 法律學士寺尾亨氏著
國際法講坐擔任

國際私法近刊

●菊版背皮クローズ金字入
●紙質精撰最上美本●紙數
凡八百頁

本書は國際法專攻の學者として有名なる寺尾先生が、多年研究の結果に成りたる大著にして、眞價の如きは敢て茲に贅するを要せず、夙に天下の定論の所なり、今や條約改正の事業は着々其歩を進め、涉外事項の研究は一日も忽にすべからず、殊に司法官辯護士試験科目に於ても亦新に斯法の加はるを見る、現下稿を脱して既に湖刷に附せり、斯法篤志者諸君請ふ指を屈して暫らく此書の出るを待て。

黒頭尊者著

淚珠唾珠

印刷中

喜笑怒罵、盡く文章となる、此れ文士の手段か、漣々たる涕淚、紛々たる咳唾、一々珠玉と爲る、此れ尊者が通力か、玉か石か、尊者豈に自ら知らんや。試みに之を地に擲て、若し鑑爾として金聲せば、則ち聴く者の耳之を爲す也。

